

〈編著者〉

内山 知也
佐藤 一郎

〈執筆者一覧〉（五十音別）

内山 知也
黒田真美子
呉 念聖
小松 建男
佐藤 一郎
渋谷誉一郎
中本百合枝
八木 章好

〈編集企画者〉

今枝二郎（大正大教授） 佐藤一郎（慶応義塾大教授） 田中有（実践女子大教授）

著者承認
検印省略

中国小説小事典〔中国文化全書7〕

©1990

平成2年3月25日初版発行 定価2,600円(本体2,524円)

編著者 内山 知也
佐藤 一郎
発行者 手 島 正 治

発行所 株式会社 高文堂出版社

東京都千代田区神田小川町2-4

芙蓉ビル 郵便番号 101

電話 東京 (03) (293) 9491

振替口座番号 東京5-97250番

落丁・乱丁その他不良品がありましたら、本社でお取りかえ致します。 組版・ミウキ総合印刷
印刷・モリモト 製本・塙製本

I S B N 4-7707-0316-3 C3397

中国文化全書

中国小説小事典

内山知也 編著
佐藤一郎

高文堂出版社

目 次

凡 例·····	4
中国小説概説·····	5
項 目·····	9
あとがき·····	155
索 引·····	157

凡 例

- この事典は、中国の古典・現代小説に関連する452の項目について説明したものである。
- 項目は現代かなづかいの五十音順に配列し、すべてひらがなで表記した。
- 項目の読みは、おおむね慣用に従った。
 - 人名は、原則として姓名で掲出したが、字・号などで知られている場合には、これらによることもある。
 - 作品名は、翻訳が刊行されている場合は、原則としてその訳題に従う。
- 人名項目のうち、近・現代のものには、中国音（漢語拼音方案によるローマ字表記）を付した。但し、声調符号は省略した。
- 人名項目（作中人物を除く）には、生没年を付した。
- 本文は、原則として現代かなづかい、当用漢字を用いるが、専門用語については慣用のものを用いる。
- 暦年は、原則として西暦を用いる。
 - 必要に応じて年号をも併記した。
- 難読語には（ ）に入れて読みを示した。
- *印は、その項目が独立項目として掲出されていることを表す。
- 各項目の末尾に執筆担当者の姓を記した。
- 索引は、人名・作品・事項の3部分に分け、各々五十音順に配列した。
- 索引の中には見出し項目だけでなく、その他本文中の重要項目も含めた。

中国小説概説

小説ということばは中国の前漢初期に生まれ、以後長く文学ジャンルを表すことばとして使用されてきた。現在では中国も日本も、英語でいう fiction, story, novel, romance, フランス語の roman, nouvelle, conte の意味に用いているが、それは近代になってからの現象で、それ以前の中国における小説の概念は今とはずいぶん異ったものだった。

小説ということばが最初に使われたのは『莊子』外物編の任国の公子が大魚を釣った話の後に続く論の部分、その場合、道家学派の立場から他学派の遊説のさいの論説をけなして＜短い些細なお話＞という意味に使用している。そこから推測されることは、こうした小説は遊説家たちが王侯貴族を説得するさいに使用した、興味を引きそうな、神話伝説・寓話説話・人物逸話・歴史地理・経済文化など万般にわたる短い情報であって、まずこれによって相手の心をひきつけ、次に自論を展開するものであった。要するにこのころの小説（説）とは語られ伝承されていた思想家用の小話を指しているのである。

前漢以後は、そういう小説（雑多な小話）の中に神仙方士の話や、災異説・天人感應説などの要素が入りこみ、やがて魏晉南北朝時代からは、仏教説話や道教説話が圧倒的な量とその内容の面白さで小説の中心を占めるようになる。いわゆる志怪小説と呼ばれる小説集として曹丕『列異伝』・張華『博物志』・干宝『搜神記』・陶潜『搜神後記』・劉敬叔『異苑』・吳均『続齊諧記』のような高官や文人たちの名のもとに編集された神仏や怪異のはなしを収めたものが生まれ、王嘉『冥祥記』・王嘉『拾遺記』のような神仙術にまつわる説話集、劉義慶『世說新語』のような名士の逸話を集めたいわゆる志人小説が出た。

中唐初期から、中下流の官僚たちによって史伝ふうの構成で、作者の意図が論賛ふうに末尾に付けられる、社会批判や恋愛を主題とした虚構性に富む短編小説が書かれ始めた。これらは晩唐に至るまでの短い期間であったが、後世伝奇小説と呼ばれ唐代小説の代表作とされる。沈既濟『任氏伝』『枕中記』・許堯佐『柳氏伝』・李公佐『南柯太守伝』『謝小娥伝』・白行簡『李娃伝』・元稹『鶯々伝』・沈亞之『馮燕伝』などがその代表的な作品である。一方同時に前の時代の伝説を受け継ぎながら、やはり虚構性に富む志怪小説が書かれ、以後清朝末期に至るまで、志怪・志人・伝奇の流れは絶えず継続する。

宋代に入ると市民大衆を相手の講釈師（説話人）がそれぞれ常設の小屋を持ち専門分野の語り物を聞かせるようになり、その語り物の簡単な筋書きが木版の印刷物として売り出されるようになった。これが話本である。それは白話文によって書かれ、章回を立てて短い話を連鎖的に繋げてゆく様式であった。この白話小説の様式は後世に継承される。

元代を経て明代に入ると羅貫中『三国志演義』・施耐庵羅貫中『水滸伝』のような歴史事件を背景とした長編作品、吳承恩『西遊記』・許仲琳『封神伝』のような神仏魔神の物語、笑々生の『金瓶梅』のような人間の欲望の深淵を追求した作品などが続々と刊行され、白話長編小説は最高潮に達した。明代にもなお文語文（文言）で書かれ、知識人を対象とする瞿佑『剪燈新話』のような怪異・恋愛の小説とか、宋代話本に模した短篇白話小説集が馮夢竜や凌蒙初によって刊行された。

清代はその初期において恋愛を主題とする曹雪芹『紅樓夢』、科挙を諷刺批判する吳敬梓『儒林外史』などの長編白話小説が出た他に、文言短編小説集として蒲松齡『聊齋志異』・紀昀『閱微草堂筆記』などが世に出た。清末になると学者文人の物語として李汝珍『鏡花縁』など、歓楽街の女と才子の恋愛を語る魏秀仁『花月痕』などの物語、俠客・裁判

を主題とする文康『児女英雄伝』・石玉崑『彭公案』などの物語が現れる一方、清朝政治や社会批判を意図する作品が続出し、小説の題材が豊富になった。

近代に至り、文言文ではあるが林紓により欧米諸国の小説が翻訳紹介され、それによって異国の小説と接した中国小説は近代化への契機をつかんだ。さらに胡適の白話文の提唱、陳独秀の文学革命論の主張により、小説も平易な白話による明快な社会文学の方向へと大転換し、中国文化の封建性を打破し社会主義社会へ一気に変革しようとする政治運動の渦の中で、小説の力によって社会を改良しようとする魯迅の『狂人日記』や『阿Q正伝』は、新しい知識階級の人々に、強烈な衝撃を与えた。小説は大学教授を中心とした知識人の指導する雑誌を発表の場とし、社会に問題を投げかけるようになった。郭沫若・郁達夫・周作人らの後を追って、老舍や丁玲たちが新しい作風をもって登場し、新しい長編小説への展望を開いた。

しかし国内に政治闘争が起り、さらに日中戦争の勃発のため、作家たちは苛酷な状況の中に置かれたが、それにもかかわらず現実を反映するすぐれた作品を発表し続け、巴金・茅盾・聞一多らが活躍した。

42年の解放区延安における毛沢東のいわゆる「文芸講話」が発表されて以降、農村の解放闘争や労働者・兵士の英雄的行動を題材とした作品が発表された。しかし文化大革命によって多くの作家が批判追放され、また死に追いやられた。その終結を待って、いわゆる「傷痕文学」と呼ばれる文革反省の小説が発表された。近・現代の小説は新中国の国家体制の事情により思想と政権の力に甚しく影響され続けて来たと言えよう。

中国小説はその始まりが遊説家の説得に使われる短い物語であったとしても、次第に膨大で雑多な思想を含む話を包みこむようになり、つ

いに目録学の上でも整理しにくい分野になってしまった。本来知識階級の人々の小さな集まりの中で、話題に上った興味深い話を、一座の文章の得意な人が書きとめ、読みまわしてゆくという形式が唐代あたりまでの一般的傾向であった。そういう話を集めたり、自分でも創作して数巻の書物にまとめあげる人が出てきたのも唐代であった。文言小説はたいいそういう過程で書かれ読まれていったものである。ところが大衆相手の白話小説では、たとえ著者が知識人であっても、広汎な市民層を対象としなければならず、しかもうるさい知識人の一読にも堪える内容にしなければならなかったから、新しくわかりやすい口語文の創造、物語構成の複雑化・人物形象の新鮮化、読者の必要に応じた領域設定などを考案し続けなければならなかった。もちろん出版事情のからみ合いもあって、作者の立場は唐以前ほど単純ではなくなって来た。清以前は時の王朝と儒教倫理が当面の鬼門で、うまく表面を偽装しつつ、作者は自作の保全を計ってきた。ところが文学革命以後の小説家は、自ら中国近代化と社会主義社会建設のための尖鋭な武器になろうとし、自らの作品を苦闘の近代史たらしめようとした。作品は多数の雑誌、単行本によって広く大衆に愛読され、また多くの文学理論家によって評論が発表されるようになった。かつて『水滸伝』金聖嘆評などが、その欄外や文中に批評鑑賞のことばを事細かに割り込んで刊行されたような不体裁なことはなくなり、小説の評論は全く独立し、新しい文学理論の世界を形成したのである。(内山知也)

【あ】

あえい 【阿英】 → せんきょう
うそん〔銭杏邨〕

あきゅうせいでん 【阿Q正伝】
* 魯迅の代表作。1922年完成。阿は江南地方で人名に付ける接頭語である。魯迅の母の故郷紹興郊外を連想させる未荘のルンペン・プロレタリア阿Qが主人公である。彼は「大へん自尊心がつよく」「相手の強弱を見はからって」やっつけ、たとえ閑人たちに殴られても、「俺はとにかく子供に殴られたってものだ。近ごろの世の中は成っちゃいねえ」と、事実関係を逆転する「精神的勝利法」を知っているのである。これはそのまま当時の知識人の奴隸的精神の本質を突いており、モデルが自分ではないかと戦々恐々とした人も多かった。賭博に勝ちながら、喧嘩騒ぎのうちに銀貨の山が失われたときもそうである。自分で自分の頬を打って別の人間を打った気分になり、満足する。この痛烈なる諷刺は、阿Qの事大主義と彼を取り巻く未荘の人々の事大主義の描写へと展開する。彼は趙大旦那から平手打ちを食うが、殴ったのが有名人で

ある以上、殴られた方も有名になるという繋りで人々から尊敬されることになった。この阿Qが静修庵の若い尼さんをからかったあたりから、女に迷い始める。趙大旦那の家の女中に唐突な求愛の行動に出て、村八分の目に遭う。彼を未荘で雇う者がなくなり、城内へと向った。もしも「阿Q正伝」を前・後両篇に分けるとすれば、時間的に見ても構成の上からいっても、ここで前篇は終わっている。後半は城内から再び未荘に現れた阿Qの羽振りのよさと、やがて正体が割れてからの村人の対応ぶりを描く。彼は城内でコソ泥を働いていただけであり、わけも分からずにたまたま遭遇した辛亥革命に巻きこまれてしまう。阿Qは強盗事件の罪を一人で背負わされて死刑になる。未荘ではみんなが阿Qが悪い、銃殺されたのは悪い証拠だといった。この小説は第九章の「大団円」で終わっているが、鄭振鐸はこの結末は「これ以上書きつづけたくないので、このように勝手に大団円を以て締めくくってしまったかのように見える」と批判している。これに対し魯迅も「阿Q正伝の成因」において、この事実を認めているのである。魯

迅は作品自体の物語性の展開を追いつづけるというより、あくまでも鋭い批評的小説を得意とする作者なのである。(佐藤)

あじょう 【阿城】 A Cheng (1949-) 本名は鍾阿城。北京に生まれる。父親は映画評論家。文革のため高校1年で学業を中断、1968年より山西省・内蒙古・雲南省へ下放され、79年ようやく北京に戻る。北京中国図書進出会社に就職し、結婚する。処女作「棋王」(’84) がヒット、その後続々と中短篇を発表。85年作品集『棋王』が刊行された。文革中の異常体験を、日常性の面から掘りさげているところに特色がある。(佐藤)

【い】

いえ 【家】 ^{*} 巴金 (はきん) の代表作。1931年4月から32年5月まで『時報』に連載、単行本は33年5月開明書店より刊行。五四運動の波は閉鎖的な内陸の四川省成都にも押し寄せ、封建的大家族は解体。若者の中、覚慧は反逆者の道を選んだが、嫡孫の覚新は躊躇しつつ、ついに古い家の殉死者となった。また、梅・瑞珏・鳴鳳の

三女性は身分こそ違うものの、共に死を以て封建制度の罪惡を訴えた。このベストセラーを脚色した^{*}曹禺の新劇も有名。(呉)

いえん 【異苑】 六朝の志怪小説集。劉宋の劉敬叔 (? - 470ごろ) の撰。敬叔は字、名は不詳。彭城 (江蘇省) の人。官は征西長史、給事黃門郎など。『隋書』経籍志は10巻と著録し、現在『津逮秘書』・『学津討源』などに収められる通行本も10巻であるが、宋元の書目には載せられていず、原書のままだはないだろう。書名は、^{*}劉向の『説苑』を模したもので、自然現象の怪異や動植物の異聞、紫姑神など民間信仰の神靈、鬼や妖怪の異事など各種の神怪異聞を集めている。数条の例外を除いて、いずれも数十字の短章で、全巻382条。先秦から劉宋に至り、晋代がとりわけ多い。(黒田)

いくたつぷ 【郁達夫】 Yu Dafu (1896-1945) 現代の小説家。本名は文、字は達夫。浙江省富陽県の生まれ。三歳で父を失う。1913年、日本留学生出身の長兄夫妻に伴われて来日。一高特設予科・八高を経て東大経済学部を卒業。卒業の前年には郭沫若たちと^{*}〈創造社〉を結成し、ロマン主義

文学の代表的な作家となる。21年執筆、22年に刊行した小説「沈淪」は郁達夫の出世作であり、その大胆な自己告白と性描写のために大きな反響を呼んだ。さらには異国での軍事的弱小国民としての悲哀の感情も、注目された。達夫は多情多感な、インテリとしての弱さを多分に持った作家である。それゆえに現代中国の激動期に、〈創造社〉の左傾とともに一旦は左傾するが、陣営内部の矛盾に耐えきれずに脱落する。大革命・抗日戦争の各段階を通じて、この行動の繰り返しであり、シンガポールを経て、スマトラへ脱出。43年、華僑の娘と結婚。日本軍憲兵隊に通訳として働かされるが、45年9月日本憲兵によって殺害された。大革命後、魯迅と文学活動を共にした時期がある。小説は心理描写に深く入り、日本の大正文学の影響も見られる。(佐藤)

いくんぎ 【韋君宜】 Wei Jun yi (1917—) 北京出身。1934年清華大学哲学科に入学。翌年“12・9”学生救亡運動に参加、以後共産党の地下活動に従事する。『中国青年』などの編集や中学教師をしながら小説を書く。46年、短篇小説「三人の友達」を発表。

解放後は『中国青年』・『文芸学習』の編集長となる。散文集『前進する足跡』('54)、短篇小説集『女人集』('80)・『似水流年』('81)・『老幹部別伝』('81)などを出版。^{*}文革期に厳しい批判を受けるが、79年に名誉回復し、現在は人民文学出版社社長。(中本)

いけんし 【夷堅志】 宋の洪邁(こうまい 1123—1202)の撰。神異奇怪の話を集めた文言小説集。現在通行の本は甲乙丙丁4志(集)に分かれ、各志は20巻から成る。各志に序文があり、乙志の洪邁の序は乾道2年(1166)に書かれ、丙志の序は乾道7年(1171)の撰であるから、相当長期にわたって各志ごとに続刊されたものと思われる。もと420巻があったが、散佚して現在のものとなった。現在、中華書局何卓校点本(1981刊)、上海商務印書館排印本、『叢書集成初編』本、『筆記小説大観』本(50巻)などが入手し易い。(内山)

いじょう 【圉城】 長編小説。古典文学研究者の銭鍾書(1910—)の作品。1947年発表。留学帰りの方鴻漸を中心人物とし、筆は抗日戦争勃発後、上海から西南後方に行った知識人の面々に及ぶ。とりわけ李梅亭や韓学愈のような

いわゆる〈灰色の知識人〉の醜悪さを暴き出した。描写は仔細、筆致は軽妙、風刺は辛辣。〈新儒林外史〉の別称を持つ。多くの外国語に訳され、邦訳には88年刊の岩波文庫『結婚狂詩曲』がある。(呉)

いっそうろう 【一層楼】 モンゴル語で書かれた小説。32回。作者はモンゴル人の尹湛納希(1837-92)、漢名は宝衡山、字は潤亭。このほかに、12世紀後半からのモンゴル民族の興起をジンギスカンを中心に描き、120回を予定していた『青史演義』(現存するのは69回まで)、『一層楼』の続編である『泣紅亭』などの著作がある。内容は、賁璞玉という若者とこれを取り巻く3人の女性の交際を描いた作品。『紅楼夢』の影響が顕著である。(小松)

いむろく 【異夢録】 唐の文言小説。沈亜之(しんあし 782ころ-831ころ)の作。亜之、字は下賢、呉興(浙江省)の人。元和10年(815)進士及第。夭逝の詩人李賀に「呉興の才人」と呼ばれ、文詞の才に秀でた。ほかに「秦夢記」も書いた。『沈下賢文集』巻2に収録。『太平広記』巻282にも「邢鳳」と題して収められている。

2種の故事を述べ、その1は、邢鳳が夢中美女に会い、「春陽曲」と題する詩を授かるが、夢から醒めても袖中に詩が残されていた話。その2は、王炎が夢の中で、呉王に仕えた話である。(黒田)

いんわろく 【因話録】 唐の文言小説集。趙璘の撰。璘、字は沢章、平原(山東省)の人。開成(836-840)の進士。官は大中年間(847-860)、衢州(浙江省)刺史。『新唐書』芸文志・『宋史』芸文志は6巻とし、『崇文総目』は2巻とするが、現在『稗海』などに収められているのは6巻。上海古典文学出版社排印本(1958刊)もある。本書は、宮、商(上下)、角、徵、羽の五部に分けて、君、臣、人、事、物にちなむ逸話を各部に配している。玄宗から宣宗の時代までの事柄が記されている。(黒田)

【う】

うんきゅうしちせん 【雲笈七籤】 宋の張君房の撰。122巻。天禧3年(1019)真宗の勅命により、秘閣の道書4560巻の要点を集約して完成したもの。七籤とは道家では経典を7部に分けることによる。

1巻から28巻までは道教の宗旨及び神仙の位籍について、29巻から86巻までは服食・鍊氣・丹方・符図・庚申・尸解（しかい）の諸術について、87巻から122巻までは、先人の文学と伝記などを記す。原典のまま抜萃しているので資料としても優れている。『道蔵』太玄部に収められるほか、民国73年（1984）台北刊影印本などがある。（内山）

うんけいゆうぎ 【雲溪友議】

唐の文言小説集。范攄（はんちよ）の撰。攄は五雲溪人と号した。懿宗、僖宗のころの人。3巻、12巻。南宋に既に2種通行していた。3巻本は、『四部叢刊』統編所収明刊本であり、65則を収めている。各則に3字の標題と、巻頭に自序がある。12巻本は、『稗海』所収。標題も自序も無い。上海古典文学出版社排印本（1957刊）もある。内容は、唐詩または詩人に関する逸話が大半を占めている。自序によれば、若いころから各地の山水に遊びそこでの交遊から聞き集めたものを記録したという。（黒田）

うんろくまんしょう 【雲麓漫鈔】 南宋中期の趙彥衛（衡）の撰。現存本は15巻。内容は宋代の雑事が3割、考証的記事が7割といわ

れる。開禧2年（1206）の撰者の自序があり、もと『癡癡閑紀』と題されていた。また『叢書集成』本の著者不明の序には『癡癡閑話』と題されている。趙彥衛の字は景安、紹熙年間（1190-94）蘇州烏程の県令、徽州通判を経て、1206年新安郡の長官となっていた。生卒不詳。『叢書集成』本、1957年上海古典文学出版社排印本、『稗海』本、『筆記小説大観』本（4巻）などがある。（内山）

【え】

えいれつでん 【英烈伝】 明の長篇小説。作者不明。一説に明の武定侯郭勛（かくくん）の作（『野獲編』巻5）。元末明初の動乱を、明の太祖朱元璋及びその家臣の活躍を中心に描く。現存するテキストは、本文を60章（60則）に分けるものと80章（80則又は80回）に分けるものの二系統がある。前者の系統では、万暦19年（1591）刊の『皇明開運英武伝』が今のところ最も古く、後者の系統では、万暦44年（1616）徐如翰の序をもつ『雲合奇蹤』が古い。『雲合奇蹤』系のものは孫楷第氏によれば、更に各回の標題が四言二句である甲

本と七言単句である2本に小区分できる(『中国通俗小説書目』)。現在『英烈伝』の名で出版されている活字本(上海古籍出版社 1981、宝文堂書店 1981)はともに2本である。テキスト間の関係について言えば、80回本は60則本を増補したものである。ただし60則本も、それ以前にあったテキストを増補したものらしい。徳田武氏によれば、江戸時代に出た『通俗元明軍談』は60則本を原本としている(『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店 1987)。(小松)

えつぜつしょ 【越絶書】 春秋時代の越国の歴史書。『隋書』経籍志以来、子貢または子胥の撰とされてきたが、『四庫全書総目提要』は、後漢の袁康の撰とした。康、字は君高、会稽(浙江省)の人。15巻。『崇文総目』では、内紀8篇、外伝17篇とするが、『四部叢刊』・『古今逸史』などに収められる通行本は、内経・内伝6篇、外伝13篇に減っている。呉越地方の地名の説明や、それにちなむ逸話が大半を占める。伍子胥・子貢・范蠡などの言行も記され、史書に精彩を与えている。『呉越春秋』と相出入する。(黒田)

えつびそうどうひっき 【閩微

草堂筆記】 清の筆記小説。作者は紀昀(きいん 1724-1805)、字を曉嵐といい、四庫全書の総纂官を務めた。その晩年の余暇に書かれた「灤陽(らんよう)消夏録」6巻、「如是我聞(にょぜがもん)」4巻、「槐西(かいせい)雑誌」4巻、「姑妄聴之」4巻、「灤陽統録」6巻の計5種24巻を合わせて、門人の盛時彦が嘉慶5年(1800)に『閩微草堂筆記五種』として刊行した。自ら見聞した奇異な逸話を、“事実”として記録する態度で、格調正しい古文で淡々とつづっている。(八木)

えつまんどうにつき 【越縷堂日記】 清末の李慈銘(1829-1894)の撰。全64冊。咸豊3年(1853)から光緒15年(1889)に至る37年間を日記ふうに、読書考察の記録に、当時の邸報や上諭の記録も交えている。1920年に51冊が出版され、33年に13冊が続刊され『越縷堂日記補』と称した。(内山)

えんおうこちょうは 【鴛鴦蝴蝶派】 清朝末期から五四運動前後にかけて、上海を中心に流行した文学流派。狭義には民国初期に駢儷文で書かれた才子佳人小説のこと。広義には文体は文語、口語を問わず、清末から五四運動にか

けて流行した趣味的、遊戯的色彩の濃い小説をいう。その内容は、社会、暴露、花柳、恋愛、家庭、推理、滑稽、歴史、神怪、武俠など多岐にわたっている。鴛鴦蝴蝶とは才子佳人を、つかず離れずにいるつがいのオシドリやチョウチョに例えた謂である。本来は文学革命の提唱者が批判の意味をこめて用いた。初期の代表作家は徐枕亜、吳双熱、李定夷など。代表作『玉梨魂』・『蘭娘哀史』などは、上海で刊行されていた『民権素』・『小説叢報』・『小説新報』などの雑誌に文語体で発表された。その後、雑誌『礼拜六』には口語作品が掲載された。これらは「礼拜六派」とも称された。後期の代表作家は張恨水で、代表作は『啼笑因縁』である。五四運動期の新文学の提唱者は、鴛鴦蝴蝶派の遊戯的で趣味的色彩の濃い文学観に強く反発したが、その影響は根強く、解放後になって初めて消失されたとされる。(渋谷)

えんぎしょうせつ 【演義小説】明清小説の一種。内容的には歴史の事実を基にしてこれを敷衍したもの。宋元の説話の中の講史（歴史物）を継承したので〈講史小説〉ともいう。または〈歴史小説〉と

も呼ばれる。文体ではみな章か回で分けられた章回体を使うので〈章回小説〉に属する。言葉では演義小説の祖『三国志演義』だけがまだ「半文（文語）半白（白話）」の過渡的な性質を持つが、『水滸伝』以降はみな俗語で書かれ、〈白話小説〉となった。作品のほとんどが長年民間で流布され、かなり洗練された話本に文人の手を加えたものなので、物語性と通俗性を兼ね備えている。印刷術の発達につれて享受層はますます広がり、今日なお大衆に好かれ読まれている。有名な演義小説にはほかに『三宝太監西洋記通俗演義』・『残唐五代史演伝』・『前後七国志』・『西漢通俗演義』・『東漢通俗演義』・『東西晋演義』・『英烈伝』・『楊家府演義』・『水滸後伝』・『隋唐演義』・『檣机閑評（とうこつかんぴょう）』・『樵史通俗演義』・『女仙外史』・『説岳全伝』・『東周列国志』・『説唐全伝演義』・『蕩寇志』などがある。（小松）

えんけいさいじき 【燕京歳時記】清末民国初の富察敦崇（とんすう 1865-1927）の撰。全1巻。光緒25年（1899）刊。敦崇は満州旗族の出身。内容は主として、清朝中期以前の首都北京における